

馬の随葬例について

乙益重隆*

今回の古城横穴群の発掘調査にあたり、かつて昭和33年12月より翌年3月にかけて断続的に調査した、第1号より第10号にわたる横穴群は、図面縮尺統一のため再度実測図を作成する必要を生じた。たまたま作業を進めて行くうちに第2号横穴内部の左屍床から1頭分の馬の歯が検出された。それは明らかに前回調査時に見落したもので、おそらく随葬されたものであろう。

このような古墳や横穴に馬を随葬した例については、すでに森浩一⁽¹⁾氏の精緻な論文があり、今更贅言を要しないが、その後の出土例を調べると意外に多いので、改めてとりあげることにした。これらを大別すると古墳の周溝内や、周溝の近くに土壌を掘り、その中に1頭分または体軀の一部を埋納したものと、古墳石室内部や横穴の内部に、体軀の一部を切取って納めたもののほかに、馬だけの単独埋葬がある。まず熊本県内の出土例から検討を進めたい。

熊本県玉名市大字玉名通稱宮山馬出古墳⁽²⁾

古墳は玉名平野の西北部、字永安寺の永安寺東古墳（装飾古墳）から東に約250mにあたる、宮山台地上にあった円墳で、内部は横穴式石室であった。石室奥に石屋形があり、その奥壁と左右内壁および正面両袖石に三角形連続文や円文を線刻していた。石屋形の前面には幅広い通路をはさんで2区の屍床が設けられ、床は石敷であった。古く盗掘をうけ、中央通路を中心に耳環1対をはじめ刀子、鉄鏃、轡、勾玉、切子玉、ガラス小玉等が出土し、おそらく6世紀頃の所産であろう。床面にはこれらの他に馬の頭骨1頭分が検出されている。

同県熊本市古城町、県立第一高等学校敷地内、古城横穴群第2号

本例についてはすでに「Ⅳ 横穴墓と遺物」の項にのべた通りである。

同県同市黒髪町宇留毛浦山、つつじヶ丘療養所内⁽³⁾

上野辰男氏によると昭和42年3月、療養所の敷地拡張工事にさいして数基の横穴が破壊され、うち1基の内部から人骨とともに馬の脚骨1本が出土したという。同横穴の一つから須恵器も出土したといわれ、おそらく周辺の宇留毛横穴群や浦山横穴群の一連をなすものであろう。

同県下益城郡城南町大字塚原字丸山、塚原古墳群のうち丸山第26号⁽⁴⁾

円墳の周溝内より土師器・須恵器のほかに馬歯と轡金具が出土している。馬歯と轡は周溝の西側に設けられた陸橋の南溝内より検出され、馬の頭部も北西に、鼻部を南西に、顎底を上に向けた状態に置かれていた。おそらく本来轡金具を装着した頭部を切断し、周溝内に埋められたものという。

同県同郡同町大字同字同、塚原古墳群のうち丸山第27号墳⁽⁵⁾

* 国学院大学文学部教授

馬歯・馬骨出土古墳一覧

古 墳 名	所 在 地	墳 形	出土地点	種 別
馬出古墳	熊本県玉名市玉名 通稱宮山	円 墳	横穴式石室内	馬頭骨
古城 2 号横穴	〃 熊本市古城町	横穴墓	玄室内左屍床	馬歯
つつじヶ丘横穴群	〃 〃 黒髪町 宇留毛・浦山	〃	玄室？	脚骨
丸山26号墳	〃 〃 〃	円 墳	〃	〃
丸山27号墳	〃 〃 〃	〃	〃	〃
塚原古墳群 39号方形周溝墓	〃 下益城郡城南 町塚原字丸山	方形周溝墓	周溝	馬歯
上の原 1 号墳	〃 〃 〃 〃 字上の原	〃	〃 (1 区)	〃
上の原 6 号墳	〃 〃 〃	〃	周溝内土壇 (4 区)	〃
上の原12号墳	〃 〃 〃	〃	〃 〃 (1・4 区)	〃
長塚古墳	〃 上益城郡御船町 久保	前方後円墳	〃 〃 (2 基)	〃
小田良古墳	〃 宇土郡三角町 中村字小田良	円 墳	横穴式石室の 屍床	馬骨
六野原地下式横穴	宮崎県東諸県郡国富町 六野原	地下式横穴？	玄室内部？	馬頭骨
小木原地下式横穴群	〃 えびの市小木原 宇久見迫～馬頭観音	土 壇	地下式横穴 1 号と 7 号との 中間	馬頭骨
芦ヶ谷古墳	岡山県久米郡久米町 芦ヶ谷	円 墳 (横穴式石室)	周溝内西端土 壇	馬骨と歯
岡第 1 号古墳	京都府竹野郡網野町 小浜	円 墳	横穴式石室内 の仕切石上に 置く	馬前膊骨 1 本
四条畷町 D 古墳	大阪府四条畷市四条 畷町	？	横穴式石室内	馬 歯
奈良井方形周溝墓	〃 〃 奈良井	方形周溝墓	周溝内の土壇	馬 1 頭
清瀧古墳群第 2 号墳	〃 〃 清瀧	円 墳	西側周溝内	歯と骨 (馬の 頭部だけを埋 めたらしい。)
丸山塚	福井県速原郡上中町 天徳寺丸山	円 墳	横穴式石室内	馬 骨
新井原12号墳の北、第 4 号土壇	長野県飯田市座光寺 新井原	帆立貝式前方 後円墳周辺	周溝の北方約 7 m の土壇内 に埋葬	馬 1 頭分
五輪堂第 4 土壇	〃 更殖市屋代新 屋五輪堂遺跡	集落内	土壇	馬 1 頭分
長泉古墳	静岡県駿東郡長泉町	円墳か？	石棺付近	馬 1 頭分
小前田第 1 号墳	埼玉県大里郡花園村小 前田	円 墳	横穴式石室内 ？	馬 歯
尾井戸円形周溝墓	千葉県柏市尾井戸遺跡	円形周溝墓	周溝に囲まれ た墓域内土壇	馬の左肩胛骨
和田蝦夷穴古墳	福島県須賀川市和田		不明	馬歯・馬骨

この表は松本健郎氏の作成による、熊本県内における「馬歯・馬骨出土古墳一覧表」にもとずき、

伴 出 遺 物		文 献
馬に伴う遺物	そ の 他 の 遺 物	
	刀子・鉄鏃・轡・勾玉・切子玉・ガラス丸玉	松本雅明編『熊本本の装飾古墳』1976
	金銅製帯金具	熊本県立第一高校『隈本古城史』1979
	人骨・須恵器	熊本市文化財調査報告書Ⅱ（北部地区）1971
轡	金環・鉄鏃（主体部）、土師器・須恵器（周溝）	『塚原』熊本県文化財調査報告書16集、1975
鉸具	須恵器	〃
		〃
	土師器・須恵器・玉類・鉄器	『上の原』同調査報告書58集、1983
	土師器・須恵器・鉄器	〃
（周溝1区轡） （周溝4区土師器	土師器・須恵器・玉類・鉄器	〃
	土師器・須恵器	『久保遺跡』同調査報告書18集、1975
	鉄剣・鉄刀・鉄矛・刀子・銅銅・瓊玉・白玉・その他	『小田良古墳』三角町文化財調査報告書、1979
轡を装着		『六野原古墳』宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告、13輯 1944
轡金具を装着		田中茂、「えびの市小木原地下式横穴3号出土品について——地下式横穴と墳丘——」『宮崎県立総合博物館紀要』2、1974
鞆・鍔・鈕上部 金具	土師質亀甲形陶棺2基・須恵器66（甕・坏・蓋・高坏・平瓶）土師器（甕・坏）鉄鏃・刀子・ヨロイ・小札・鉸具・釘	久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査団『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』2「櫛山遺跡群」Ⅱ、1975
	単鳳環頭大刀1、鏃26、刀子3、鐏子1、円棒1、勾玉3、管玉5、切子玉1、算盤玉1、丸玉1、有蓋高坏4、無蓋高坏2、有蓋浅鉢2、長頸壺1、蓋2、土師器皿1、鉄勒1、鉸具4、鉄環1、皮金具7、不明品2	『網野・岡の三古墳』京都府文化財調査報告書、22冊、1961
		直良信夫『日本および東アジア発見の馬歯馬骨』1970
	須恵器（甕・高坏・坏・甕・蓋）土師器（甕）土製模造品（人形・馬・ニワトリ・動物・玉）滑石製模造品（有孔円板）底板等の加工木片	『奈良井遺跡現地説明会』四條畷市教育委員会、1979
		『清瀧古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会 1980
	画文帯神獸鏡1、三葉環頭大刀1、双竜環頭大刀1、水晶三輪玉1、玉類一括、甕、その他	斎藤優「若狭の十善森と丸山塚の調査顛末」古代文化4号、1958
轡（鏡板付）杏葉 2、飾鋳12、黄金 具4		小林正春「新井原発見の飾られた馬」伊那4号、1980 大沢和夫「馬の墓と新井原12号墳の保存」『ごんが』、『下伊那市Ⅱ』1955
土師器高坏4、同 甕4		矢島宏雄「馬骨を出土した更埴市五輪堂遺跡」長野県考古学会誌31号、1978
馬具	石棺蓋上面より剣1、棺内に耳環1対、棺周辺には完形土器10数個出土	『考古学雑誌』8巻12号 1918 彙報
		直良信夫『前掲』
		古宮隆信他『尾井戸遺跡』1980
		『福島県史』第6巻 考古資料、1964

乙益が増補した。尚、紙面の都合上韓国の古墳に伴った馬の随葬例は省略した。

丸山第26号墳の東に隣接した円墳で、周溝内の堆積土は上部より1層は黒色土、2層目は黄褐色土、3層目は黄褐色粘質土からなる。東側周溝の2層上面より馬歯と鉸具を出土し、陸橋の東側溝内では須恵器甕片を大量に出土したという。

同県同郡同町大字同字同塚原古墳群のうち第39号方形周溝墓⁽⁶⁾

この周溝墓は上部が削平攪乱をうけており、主体部は凝灰岩の石棺であったらしく、副葬品の有無は明らかでない。周溝の一部には陸橋があり、その東方にあたる溝内の、溝底より20cm浮いたあたりに馬の歯が出土している。上下顎骨ともに遺存がわるく、歯だけが残っていたという。出土地点の周溝は幅90cm深さ60cmを有し、たとえ上部の盛土が削平されたとしても、馬1頭分を埋めたにしては溝の規模があまりにも小さすぎ、四肢骨がなかったことからみて、おそらく首から上だけを切りはなして埋納したことが考えられるという。

同県同郡同町大字同字上の原、上の原古墳群のうち第1号墳・第6号墳・第12号墳・同墳⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

上の原古墳群では合計11基の円墳群のうち第1・第6・第12号墳の3基に、それぞれの封土を囲む周溝内から、馬の歯を出土している。中でも第6号墳と第12号墳では周溝底に土壌が掘られ、馬の歯はそこから出土したという。また第12号墳周溝の1区から検出された馬歯には、わずかに離れて轡が出土し、おそらくこれは馬頭に装着されたものが、軟部の腐蝕によって離脱したものとみられている。さらに同じ第12号墳の周溝4区に出土した馬歯には土師器（埴）を伴っており、おそらく随葬時に埋納したのであろう。

同県上益城郡御船町字久保、長塚古墳⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

現地は調査前に封土も主体部も失われたため実態が明らかでない。しかし残存していた周溝から復元すると全長46.2m、前方部幅23.1mの前方後円墳で、内部は横穴式石室であったらしい。周溝は幅6～8m、深さ80～100cmを有し、西南方向に陸橋を設け、溝内より馬歯を伴う二基の土壌が検出されている。うち第1号土壌は陸橋部に沿って掘られ、溝底をさらに深さ40～50cm、長さ192cm、幅85cmをもって楕円形に掘り込み、その墳底面より約50cm浮いたあたりに馬歯がまとまって出土したという。第2号墳は深さ160～220cm、長さ156cm、幅130cmを有し、馬歯はその墳底面より約130cm浮いたあたりから出土している。したがって発掘を担当した緒方勉・田中義和氏は、馬を埋葬したことは明らかでも、土壌中に馬1頭が入れるような状態でないところから、馬の頭だけを埋納したことも考えられるとしている。

しかし上の原遺跡の発掘を担当した松本健郎氏によると、古代の馬は中型馬・小型馬（林田重幸氏によると体高120cm前後）が多いところから、長塚古墳の第1号土壌のごときは、体軀ごと埋めた可能性があるという。そして長塚第2号土壌や上の原第6号墳や同第12号墳周溝内土壌のばあいも、無理すれば1頭分埋納できないことはないといふ、一般に四肢骨や頭骨は歯に比べて腐蝕が早いことを指摘しておられる。

同県宇土郡三角町大字中村字小田良、小田良古墳⁽¹³⁾

円墳で内部は半地下式の石障系横穴式石室。すでに古く盗掘をうけていたが、石室内の周囲にめぐらした石障のうち、正面壁に靱と楯と同心円文を、左右壁と入口側壁に同心円文をそれぞれ浮彫にしており、国の史跡に指定されている。昭和53年の発掘調査にさいして、南屍床から刀子片や人骨片とともに馬の前肢骨やイヌ、イノシシなどの骨が出土している。それらは屍床の底面に礫を敷いたその直上から出土したことは事実であるが、屍床内部そのものが攪乱を受けていることから「古墳築造当時のものであるか、その後に混入したものであるのか断定できない」という。

宮崎県東諸県郡国富町六野原古墳群のうち地下式横穴⁽¹⁴⁾

この古墳群は昭和17年、現地一帯に軍事施設ができるため、円墳13基・前方後円墳1基・地下式横穴27基以上が発掘改葬されたものである。うち地下式横穴第8号から北の方20mを隔てた地点に、深さ1.80mの土壌があり、「北西壁ヨリ50纏、東壁カラ20纏ノ處ニ轡ガアリ鏡板、銜、引手等物色シ得ラレ、ソレガ馬の頸骨ニ挟マレタ儘遺存シテキタ。」という。おそらく地下式横穴内に、装具をつけたままの馬の頭骨を随葬したのであろう。

京都府竹野郡網野町小浜、岡第1号墳⁽¹⁵⁾

砂丘内に築かれた片袖の入口を有する横穴式石室墳で、人骨5～6体分が埋葬されていた。副葬品には単鳳環頭大刀1、鏃26、刀子3、鋤子1、円棒1、勾玉3、管玉5、切子玉1、算盤玉1、丸玉1、有蓋高坏4、無蓋高坏2、有蓋浅鉢2、長頸壺1、蓋2、土師器皿1、馬勒1、鉸具4、鉄環1、革金具7、不明鉄器2などがあり、遺体が多だけに副葬品も少くない。石室の最奥区を間仕切りしたその上に、馬の前膊骨が1本あったという。それは「馬の脚部を肉づきのまま死者に献げたのではないか」とみられている。

大阪府四条畷市四条畷町D古墳出土の馬歯⁽¹⁶⁾

直良信夫氏によると昭和10年前後頃、藤沢一夫氏から調査を依頼された馬歯で、第二次大戦のさい戦災で焼失したという。それらの馬歯は横穴式石室内より出土したといい、詳細についてはわからない。

福井県遠敷郡上中町天徳寺丸山、丸山古墳⁽¹⁷⁾

円墳で片袖の入口を有する横穴式石室墳。画文帯神獸鏡1、三葉環頭大刀1、双竜環頭大刀1、玉類、腿その他須恵器類などとともに人骨、馬骨を出土したといい、出土状態は明らかでない。

長野県飯田市座光寺^{あらいぼら}新井原12号墳の北方出土第4号土墳⁽¹⁸⁾

現地は長野県下伊郡地方最大の前方後円墳といわれる高岡第1号古墳から、東にむかう緩斜地にあたり、第12号墳の帆立貝式前方後円墳の他に13基の円墳が群集する。それらは長期にわたって築造されたらしく、内部構造も遺物も変化に富む。中でも第12号墳は大正11年(1922)国鉄飯田線の工事で大半が失われた。昭和55年飯田座光寺バイパス建設工事にあたり、第12号

古墳の北方、周溝外約7mに1.80m×1.10m、深さ60cmの平面観が長方形を呈した土壇が検出された。その中に1頭の馬が背を西にむけて埋葬され、骨はすべて墳底にあり、これより若干浮いて轡一式と杏葉2、飾鋳12、貴金具4が出土した。それらは馬に装着されていたもので、鎧馬そのものを随葬したのであろう。鏡板はf字形の古式に属し、新井原12号墳の年代とほぼ併行するという。

同県更埴市屋代新屋五輪堂遺跡出土の第4号土壇⁽¹⁹⁾

本例は古墳時代の集落遺跡内から出土したもので、古墳に随葬されたものではないが、馬の埋葬墓として注目される。現地は弥生時代から中世におよぶ複合遺跡で、100軒近い住居跡とともに各種の遺構が検出されている。中でも北地区から発見された第4号土壇は1.40m×1.80m、深さ50cmの楕円形を呈し、内部にはほぼ完全な形の馬1頭分が埋葬されていたという。成馬であるが小形で、首を折り、前後の足を折り曲げ、背椎骨と肋骨は腐蝕して残っていなかった。遺物には6世紀中葉の高杯・甕形土器が各4個体分、意図的に破砕されたように小破片となって残り、更に長さ10.5cm、直径0.5cmの丸い棒状の青銅製品と銹化が進み形態不明の小金属片が出土したという。おそらく土器類は埋葬にさいて供献し、しかる後破砕したものであろう。

埼玉県大里郡花園村小前田第1号墳玄室内崩土⁽²⁰⁾

直良信夫氏によると玄室内の崩土中より馬歯が発見されている。それは本来古墳の中に納めてあったものとみられている。

千葉県柏市尾井戸遺跡のうち円形周溝墓に伴う第3号土壇⁽²¹⁾

遺跡は利根川の湿地草原にむかって東北方に突出した台地の一帯にあり、土師器鬼高式を伴う住居跡8軒と、国府式を伴う住居跡の他に、須恵器を伴う円形周溝墓1基を出土している。うち円形周溝墓に伴った第3号土壇は長軸2.90m、短軸1.34m、深さ33cmを有し、舟底形を呈した墳底の北東側から、馬の左肩胛骨を出土している。土壇内部の土層には乱れがなく、特別な遺構や遺物こそ出土していないが、おそらく馬を随葬したのであろう。

福島県須賀川市和田古墳⁽²²⁾

『福島県史』史料篇によると古くこの古墳から馬歯馬骨が出土したという。

以上のほかにも古墳時代の遺跡に伴った馬骨の出土例は少なからぬものがあり、大阪府枚方市^{ひらかた}日下遺跡^{くさか}⁽²³⁾では、全身完全にそろった馬一頭分の骨が出土している。直良信夫氏の『日本および東アジア発見の馬歯馬骨』(日本中央競馬会1970)によると、他にも長野県塩尻市平出出土の馬骨⁽²⁴⁾をはじめ古墳時代とみられる出土例だけでも10数例があげられている。まして中世の屍馬埋葬例までとりあげると俄に集計できないほどである。

一体古墳に馬を随葬する風習には、本来いかなる意味があったのであろうか。

墓の内部に馬を随葬せしめる風習は、すでに中国の殷時代にさかのぼる。すなわち河南省安

陽県の侯家荘や武官村では、地下深い堅墳に木槨などによる墳墓を構築し、犬や馬、戦車を牽く馬、頭と胴を切離した人物、その他の随葬が行われた。またユーラシア草原地帯騎馬民族の墳墓には、しばしば馬を殉葬したり馬具を副葬し、中には戦車を伴うものもある。さらに『魏志』の東夷伝によると朝鮮半島南部の韓では、『其れ葬るに棺有りて槨無し。牛馬に乗ることを知らず、牛馬は死を送るに盡す』⁽²⁵⁾と見え、牛馬を葬送儀礼に供したことが知られる。こうした中国古代の風習や三世紀頃の朝鮮半島南部の習俗が、日本の古墳時代にそのまま継承されたとは断言できないが、乗馬の風習や馬具の伝来とともに影響がなかったとはいえない。時代は下降するがわが国の古典には時おり馬の殉葬（随葬）に関する記事をみかける。すなわち『孝徳天皇紀』大化2年（646）の詔にみえる禁止事項の一つには、次のような文がある。

凡そ人死亡ぬる時に、若しくは絞^しぎて自ら^も殉^{わな}ひ、或は人を絞^しぎて^{わな}殉^しはしめ、及び強^{あな}ちに亡^ししたる人の馬を^し殉^しへ、或は亡^ししたる人の^{もの}為めに^{おさ}寶を墓に^{おさ}蔵め、或は亡^ししたる人の^{おさ}為に^{おさ}髪を^き断り^さ股を^し刺して^し誅^しす。此の如き^{ふるき}旧^し俗^しは^{ふるき}一に^し皆^し悉に^や断めよ。⁽²⁶⁾

とあるように、人の殉死とともに馬の殉葬をも禁じている。この記事は当時明らかに人の殉死や馬の殉葬が行われていたことを物語るもので、それが現実に行われていたればこそ、禁止の対象となったのである。

また『播磨風土記』飾磨郡貽和の里の条によると、馬墓池の地名成立についての説話がみえる。それは雄略天皇の時、尾^は治^は連^は等の祖にあたる^な長^な日^ひ子^こなる者が、生前に良^めき婢と馬を持っていた。時に長日子が死のまぎわの遺言に「吾が^わ死^みな^む以後は、皆^は葬^はりは吾に^な准^へ」⁽²⁷⁾と稱した。そのため第一の墓を長日子とし、第二を婢の墓、第三を馬の墓とした。後に墓のほとりに池を築いたため、馬墓の池とよぶようになったという。はたしてこの記事が史実であったかどうか明らかなでないが、たとえ地名起源にまつわる説話であっても、人や馬を随葬する風習があったことは否定できない。

このように人の随葬のほかに馬の随葬が特別な扱いをうけ、他の動物が含まれていないことは、馬が単なる副葬物ではなかったことを意味するという。『雄略紀』13年春3月の条にもみえる通り、齒田根命がひそかに山邊小嶋子を姦した罪をとわれた時にも、馬八匹と大刀八口をもって罪過の「^は祓^は除^りひ」⁽²⁸⁾を行わしめており、また『天武紀』5年秋7月壬午、彗星があらわれた時にも異変対策として「大解除」が行われ、^{おほはらへ}国^{くに}造^のたちには「馬一匹、布一常」⁽²⁹⁾を^き供^たせしめている。こうした事例からみても馬は単なる財物ではなかった。その点増田精一氏⁽³⁰⁾によると「馬を神聖視し、馬に祓の力があるという観念を根底にして考えられ、さらに馬を神に捧げる風も見られ、銚馬の意義もこれと関連させられるので、古墳に馬具を副葬することはこのような観念と無関係でなかった」ことを指摘しておられる。

このようにみえてくると、おそらく古城横穴第2号より出土した馬の歯をはじめ、全国各地から散発的に発見されている馬骨については、こうした信仰的な呪術的意味があったのであろう。

それにしても古墳周溝などに1頭分の馬を埋葬するものと、古墳石室や横穴内部に馬の頭骨や四肢骨の一部を供献するものとは、何か目的上の相異があったのかもしれない。しかし今はその理由を詮策するだけの余裕もないので、類例だけをあげて後考に供したい(一覧表参照)。

註

1. 森浩一「大化薄葬令の馬の殉殺について」井上光貞博士還暦記念会編『古代史論叢』上巻 1978
2. 松本雅明編『熊本装飾古墳』56頁、熊本日新聞社 1976
3. 上野辰男「つつじが丘横穴群」(熊本市文化財調査報告書Ⅱ)(北部地区) 1971
- 4・5・6. 隈昭志・野田拓治他『塚原』(熊本県文化財調査報告第16集) 1975
- 7・8・9・10. 松本健郎他『上の原』(熊本県文化財調査報告第58集) 1983
- 11・12. 緒方勉・高木正文・田中義和「長塚古墳」『久保遺跡』(熊本県文化財調査報告第18集) 1975
13. 松本雅明・隈昭志・江本直・他『小田良古墳』(三角町文化財調査報告) 1979
14. 梅原末治・瀬之口伝九郎・他『六野原古墳』(宮崎県史蹟名勝天然記念物調査報告書第13輯) 1944
15. 樋口隆康他『網野岡の三古墳』(京都府文化財調査報告書第22冊) 1961
16. 直良信夫『日本および東アジア発見の馬歯馬骨』日本中央競馬会 1970
17. 斎藤優「若狭の十善森と丸山塚の調査顛末」(古代文化第4号) 1958
18. 市村成人「古墳」『下伊那史』第2巻 1955
小林正春「新井原遺跡発見の飾られた馬」(伊那第4号) 1980
大沢和夫「馬の墓と新井原12号墳の保存」『ごんが』
19. 大島宏雄「馬骨を出土した更埴市五輪堂遺跡」(長野県考古学会誌31号) 1978
20. 註16
21. 古宮隆信他『尾井戸遺跡』尾井戸遺跡調査団 1980
22. 『福島県史』史料篇、福島県 1964
23. 『日下遺跡』帝塚山大学考古学研究室 1906
24. 平出遺跡調査会『平出』朝日新聞社 1955
25. Sergei I. Rudenko. (Translated and with a Preface by M.W. Thompson. 1970) Frozen tombs of Siberia
—— The Pazyryk burials of Iron age horsemen. —— 1953.
26. 商務印書館本により書き改める。
27. 『日本書紀』平泉澄校訂、大日本文庫本 1934、による。
28. 『風土記』日本古典文学大系2、1958による。
- 29・30. 註27による。
31. 三木文雄・増田精一「副葬品」日本考古学講座5、1955
32. 森浩一「古墳出土の馬具」、森浩一編『馬』日本古代文化の探究、1974